

K-701

川原子1号土壙

発掘調査報告書



1986

天童市教育委員会

序

本報告書は、天童市教育委員会が実施した「川原子1号土壙」の発掘調査の結果をまとめたものであります。

当遺跡は、天童市大字川原子の国道48号線ぞいにあり、2基が現存しておりますが、そのうちの1号土壙が、周辺一帯の山林伐採とそれに伴う整地によって失われることになったため、その記録保存を図る目的で緊急発掘調査を実施したものであります。

調査の結果、鎌倉時代末期に築造されたと推定される方形土壙であることが確認され、その構造等が明らかになりました。丁寧に土を積み重ねたそのつくりから当時の人々の宗教に対する思いが偲ばれます。

本報告書が、本市の歴史の解明と埋蔵文化財に対する理解を深めるための一助となれば幸いに存じます。

最後に、このたびの調査にあたり、主任調査員として調査計画の段階から格別のご尽力をいただいた天童市文化財保護審議会委員川崎利夫氏をはじめとする調査員の方々、そして大変な猛暑の中を作業に従事していただいた地元の作業員の方々、補助員の方々、ご協力をいただいた地権者に対し心から感謝とお礼を申し上げ序言といたします。

昭和61年10月

天童市教育委員会

教育長 渡邊 真哉

調査要項

1. 遺跡名 川原子墳墓群（遺跡番号338）
2. 所在地 山形県天童市大字川原子字中原4309の1
3. 地目 山林
4. 所有者 矢萩武嗣
5. 調査理由 山林伐採による整地作業のため墳丘が破壊されるため
6. 調査期間 昭和61年7月27日～8月2日
7. 調査主体 天童市教育委員会
8. 調査体制
 - ・調査員 川崎利夫（主任） 相田俊雄 小形利彦 安彦政信 茨木光裕
山口博之 村山正市
 - ・調査補助員 国井幹之 石山嘉英 東海林こずえ
 - ・作業員 矢萩武嗣 矢萩松男 矢萩吉夫 寒河江秀視 滝口久七
 - ・事務局 滝口弘（社会教育課長） 三沢将良（課長補佐） 秋葉俊一（文化係長）
阿部昭雄（嘱託） 安喰洋一（市史編さん室・主事）

例　　言

1. 本報告書は、天童市教育委員会が昭和61年度に実施した川原子における山林伐採にともなう整地による緊急発掘調査の概要である。
2. 遺跡名は墳墓群となっているが、本調査の結果、中世の土壙群であることが判明した。
3. 本報告書の本文執筆は、川崎利夫があたり、図版作成は主として茨木光裕、村山正市が担当し、編集は秋葉俊一と川崎が行った。なお写真は、事務局並びに川崎・相田が撮影したものによった。
4. 遺構の挿図は、本文にもとづく記号で表わし、それぞれの縮尺を明示した。
5. 1号土壙は失われたが、2号土壙は保存されることになった。土壙上にあった板碑は2号土壙の近くに移された。

目 次

序 天童市教育委員会教育長 渡邊眞哉

調査要項 例言

1. 遺跡の位置と環境	4
2. 調査の概要	6
3. 調査の成果	8
(1) 土壇の構造	8
(2) 板 碑	11
4. 結 語	12

図 版 目 次

第1図	川原子土壇群と周辺の遺跡	4
第2図	川原子土壇群全体図	5
第3図	1号土壇現況図	5
第4図	整地する以前の土壇	6
第5図	整地後、調査直前の土壇	6
第6図	1号土壇及びトレンチ設定図	7
第7図	B・Cトレンチ土層断面図	8
第8図	F・Gトレンチ土層断面図	9
第9図	土壇上面の状況	9
第10図	出土古錢	10
第11図	土壇断面土層図	10
第12図	土壇上板碑実測図	11
第13図	土壇上の板碑	11
第14図	1号土壇推定復原模式図	12

*表紙写真 発掘調査状況

1. 遺跡の位置と環境

本遺跡は、天童市の北東部に存在し、川原子と小原の集落の中間に位置し、国道48号線にそ
う東脇にある。標高165mで、その南500mを乱川が西へ流れ、乱川の高位段丘上にある。まわ
りは畠地や果樹園が多いが、遺跡付近は48号線の道路にそって杉や雜木などが生い茂る山林で
あり、この中に2つの方形と思われる墳丘がある。それらは国道にそって2基が50mの間隔で
並び、北側を1号土壙、南側を2号土壙とよぶ。(第2図)

本遺跡のすぐ東側を国道と並行して旧關山街道が通る。そして更に東側の中位段丘に川原子
の集落がある。北東から流下する乱川の段丘上には、この近くに「小原」「向原」「下悪戸」な
ど縄文時代晩期の集落跡がある。また東にそびえる水晶山(667m)は、貞觀13年(871年)從
5位下に叙された「利神」をこれにあてる説が有力で、貞觀9年に定額寺となった最上郡靈山
寺に擬する説もある。その頂上には、大和神社があり水晶を産出する竖坑が神体である。麓の
谷地中や荒井原は、中世に修驗の道場として栄えたころの門前集落といわれ、付近には堂跡や
須恵器の窯跡なども散在し、谷地中には両柱のみ残る平安時代後期の石鳥居も残っている。

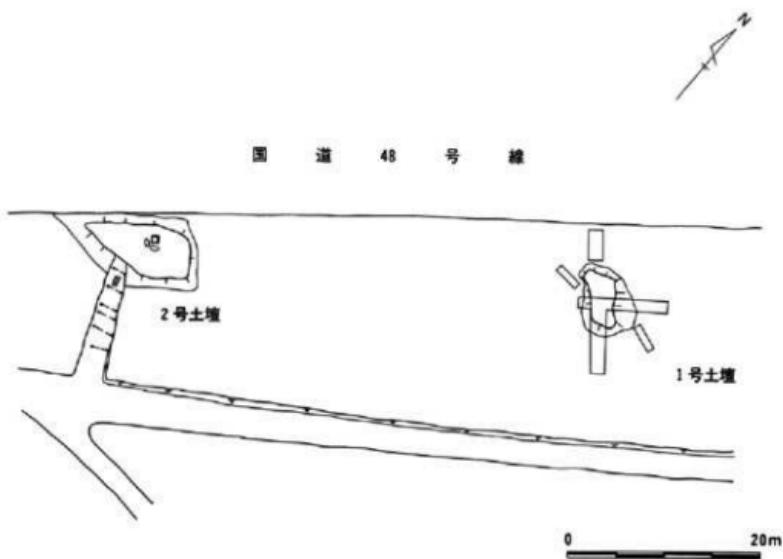
この遺跡の東方一帯は、未解明の部分が多いが、古代から中世にかけて宗教文化が栄えたと
ころとしての歴史的環境にあったのである。(第1図)



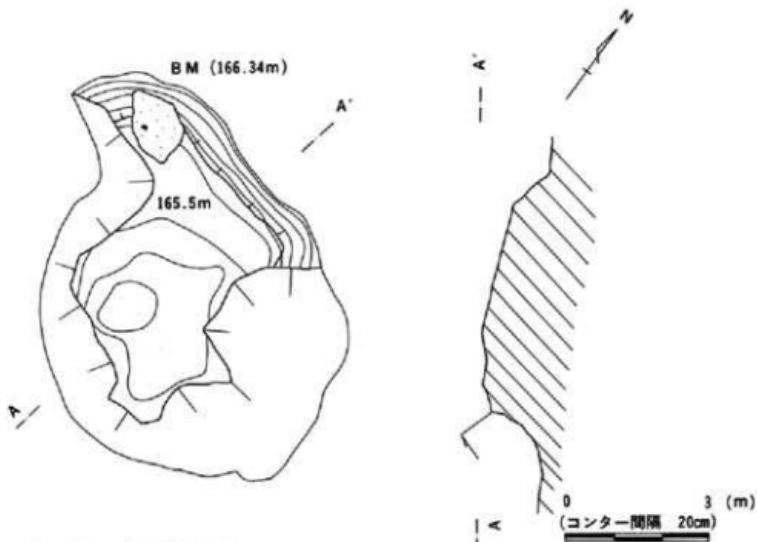
第1図 川原子土壙群と周辺の遺跡

- 1.川原子土壙群
- 2.小原遺跡
- 3.横台遺跡
- 4.向原遺跡
- 5.沼沢館
- 6.谷地中古窯跡
- 7.荒井原古窯跡
- 8.水晶山大和神社
- 9.櫛塚遺跡

国道48号線



第2図 川原子土壤群全体図



第3図 1号土壤現況図

2. 調査の概要

土壇のまわりや上にあった木の伐根が終っていたので、周辺部はかなり破壊されていた。かろうじて土壇中心部が破壊をまぬがれていた。さいわい2号土壇は、地権者の好意によって残されることになった。半壊の1号土壇の当初の形状を明らかにし、その上に立っている板碑の調査を行い、さらに土壇の築成法を把握するために、最終的に半壊することにした。(第3図)

土壇の形状が不明の状態だったので、残された壇の周辺から放射状にトレントを入れ、基礎地業の有無、壇範線、どの層から築き上げられたかをはじめにつきとめようとした。

調査日誌から1週間にわたる調査のあしどりをたどってみよう。

7月27日(日) 晴 渡邊教育長による仏式祈禱の後作業開始、現況図作成のための測量。

土壇にむかって7本のトレント設定。Bトレントより北宋銭出土。各トレントの発掘をすすめる。

7月28日(月) 晴 気温37°C。各トレントの発掘をすすめる。

7月29日(火) 晴 A B C Dトレント床面、側壁清掃。B Cトレント断面図作成。

2号土壇の近くに移した板碑の実測を行う。山口小職員14名見学。

7月30日(水) 晴 土壇上を清掃、板碑台石などを実測ののち、Aトレントより土壇頂部にむかって掘りすすむ。頂部に盗掘坑があった。

7月31日(木) 晴 A Dトレントを連結させる状態で、南北に土壇の断ちわり作業をすすめる。南北断面図作成。土壇上の台石の部分を清掃し実測図作成の作業にかかる。

市文化財保護審議会委員一行が観察。



第4図 整地する以前の土壇

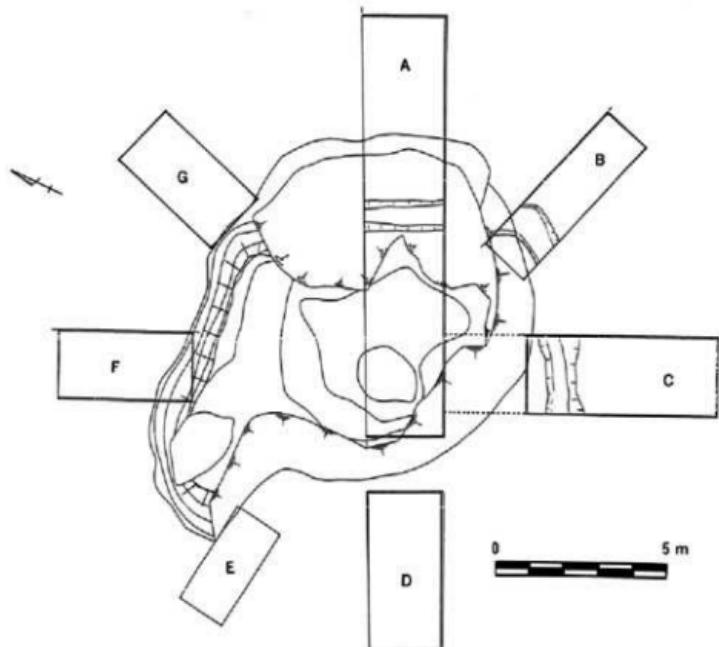


第5図 整地後調査直前の土壇

8月1日（金） 晴 Cトレーニチを西側にのばし、土壌頂部へむかって掘りすすむ。東西の断面も確認する。2号土壌附近の測量を行う。

8月2日（土） 晴 一部埋め戻しと補足調査を行い、1号土壌についてのすべての調査を完了する。

以上のような経過をたどって、土壌の規模を確定し、その平面形態を明らかにするとともに、土壌を十字に断ちわることによって築成法を把握することができた。あわせて周辺の測量図面を作成し、また土壌上にあった板碑を正確に実測することによって、ほぼ完全に近い記録保存を行うことができたのである。



第6図 1号土壌及びトレーニチ設定図

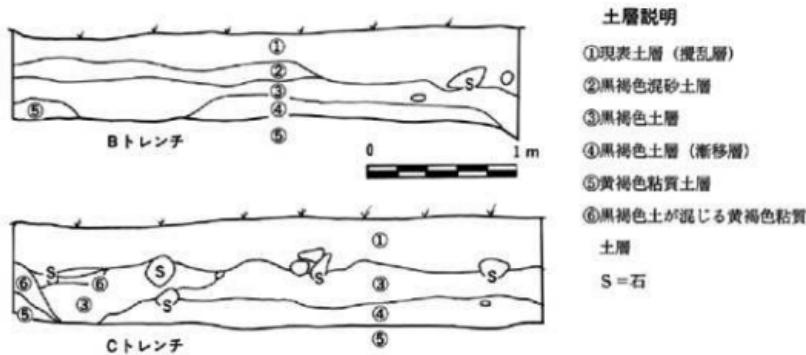
3. 調査の成果

(1) 土壌の構造

第6図で明らかのように、1号土壌の方は周辺の整地時に伐根などによって破壊され、もとの形をうかがうことができない状態になっていた。ただし土壌頂部の平坦面はかなりの部分残っていたとはいいうものの、頂部に立っていた板碑もすでに2号土壌の近くに移されていた。

放射状に入れた7本のトレンチから土壌の裾部をつきとめその形態や規模をさぐろうと試みた。最初に発掘したCトレンチの状況からみてみよう。表土30~40cmは砂利混りの擾乱をうけしており、整地の際にならされた層である。その下に黒褐色土層が10~20cmにわたって堆積している。この層は擾乱をうけていない。さらにその下層はやや黄色味をおびた漸移層となり、基盤をなす黄褐色粘質土層に移る。これには大小の礫がまじり、段丘礫層をなすものであろう。この層序は、基本的にどのトレンチでも観察され、このあたりの一般的な層序であろうと考えられる。A・B・F・Gなどのトレンチにおいても、各層の厚さや礫の多少などのちがいはあっても、これとほぼ同じ層序を示している。東側のD・Eトレンチは、整地の際に深堀りが行われ、そこにたくさんの礫を埋めこんだので、層序は擾乱していた。

Cトレンチは、土壌に近づくと漸移層と黄褐色粘質土の一部を掘りこんだ溝跡が認められた。それは幅70cm、深さ10~15cm程度で、Bトレンチにおいてもカーブをえがいてほぼ直角にまが



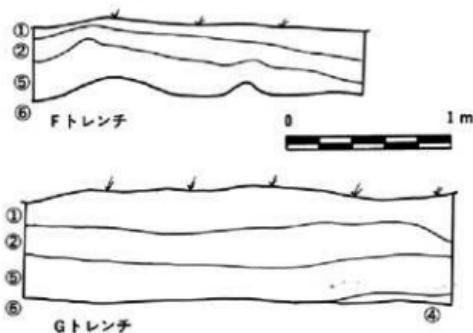
第7図 B・Cトレンチ土層断面図

る溝が検出された。そしてそれはAトレンチでもBトレンチの溝からつづく状態で認められた。従って幅70cm、つまり2尺程度の浅い溝が土壌のすぐ下をぐるっと全周していたものと思われる。(第7・8図)

そして溝の内側から直ちに起ち上がる状況はCトレンチやBトレンチ、Aトレンチの土層断面からも観察するこゝができる。Cトレンチでは溝の上面に黄色土が認められたが、土壌を構成する黄色土が崩落したものであろう。他のトレンチでもこのような状況が観察できた。(第7図)

D E F Gなどの各トレンチでは、調査前の整地の際やかつての国道48号線工事などによって、かなりの擾乱を受けていたが、F・Gなどでは一部土層断面を確認することができた。とくにCトレンチに対応するFトレンチで土壌の裾部がつきとめられ、起ち上がりの状況が把握されたので、方形を呈する対向する辺の長さがとらえられた。この土壌をとりまく溝や土壌の裾部が一部のトレンチにおいて認められたことにより、明らかに平面形は方形で、Cトレンチの裾部とFトレンチの裾部の長さは、10.6mであることがわかる。ただし平行する一組の辺の長さのみでは、長方形を呈することもあり得るわけで、そこでCトレンチとFトレンチを結んだ土壌の頂上部より、Aトレンチで確認された溝までの長さを測ったら5.4mあり、土壌基底部はほぼ正方形を呈することがわかった。

土壌の裾部、つまり基底部の縁辺の観察及び中央部を半截して断ちわりを行った結果、土壌は当時の地表である第二層黒褐色土層より積みあげられており、とくに基底部は掘りこみ地業を行ったりした跡はなく、地表を平らに整地して土を少しづつ積みあげていったものと思われる。旧地表よりの高さは1m50cm前後である。土壌上面はかなりの部分が平坦で、およそ一辺8mの方形の部分が平坦面であった。それは残っている上面の観察や半截の状況から推測されるところである。全体の形は、方形台状をなしていたと考えられる。



第8図 F・Gトレンチ土層断面図



第9図 土壌上面の状況

土壇の半載断面の土層図は、複雑な縞模様を呈するが、基本的には三つの層よりなる。旧地表の黒褐色土層を整地して同じ土を低く盛り上げて基底部をつくり、その上に黄褐色粘質土を1m近く積みあげ、上部をやはり黒褐色土でおおっている。このように崩れを防ぐため版築を行っていることが認められるのである。(第11図)

土壇上面は、掘りこまれて立っていた板碑を支える台石や板碑の下部残欠などが散乱していたし、板碑を嵌入するために掘りこまれた部分も認められた。しかし土壇上にあった板碑を移動する際かなり掘られているので、もともとの状況は把握できなかった。

唯一の遺物として、Bトレーナーの土壇基底部より古銭が一枚出土している。北宋錢の「皇宋通宝」で、表面がかなり磨滅していた。(第10図)土壇築造後に余り時をへずに奉賜されたものであろう。土壇の年代を推定する上で、土壇上に立っていた板碑とともに一つの手がかりとなる。

以上1号土壇についての調査所見をまとめると次のようになる。

- 1号土壇は、基底部の一辺10.6m、高さ1.5mの方形台状をなし、周囲に深い溝がとりまく。
- 築成にあたっては明瞭に版築が行われている。
- 土壇上に板碑が立っていた。

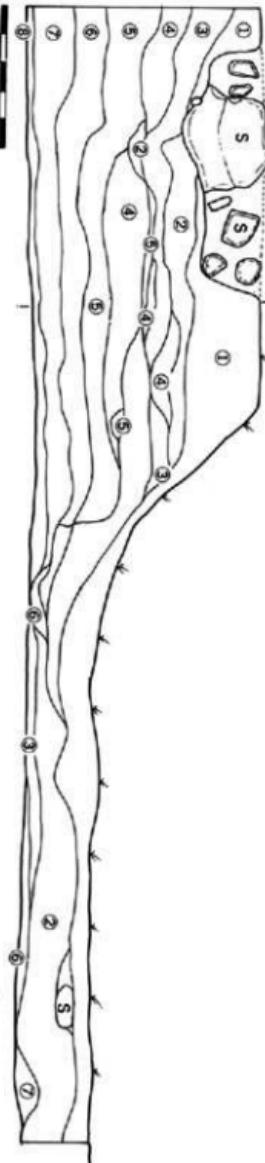


第10図 出土古銭 (1×1)

土層説明

- ① 黒褐色腐植土層
- ② 黒褐色混砂土層
- ③ 黄褐色粘質土層
- ④ 黄褐色粘質土層
(黒色土が混じる)
- ⑤ 黒褐色土層
- ⑥ 黒色土層
- ⑦ 黑褐色土層(漸移層)
- ⑧ 黄褐色粘質土層(砾を多く含む)

S = 石



第11図 土壇断面土層図
(Aトレーナーより土壇中心部へ)

(2) 板 碑

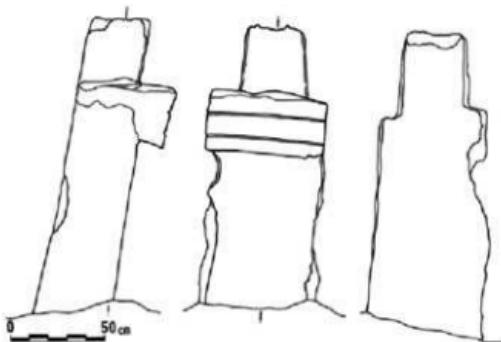
もともと土壇の上に立っていた板碑は調査開始前に2号土壇の近くへ移された。いまは2号土壇の東側に立っている。凝灰岩製で、いまの地表よりの高さ1m60cm、幅は額下で65cm、厚さ下部で40cmを測ることができる。おそらく30~40cm土中していると思われる所以、もともとの高さは2m近くあったと思われる。額部の突出15cmで、額部に二条線が明瞭に刻まれている。

(第12・13図)

特異なのは額上の頭頂部に大きな突出部があることで、上部は欠失しているが半円筒形に上方にのび、あたかも相輪を示すようである。置賜地方の板碑は、頭頂部が山型をなすが、天童市を中心とした地域の板碑は頭頂部に仏菩薩の肉髻や宝髻状の突出部が認められる。そのような板碑を成生莊型板碑とよんでいるが、頭頂部に突出部がある点では成生莊型板碑の範疇に入るものの、このように相輪様のものをあらわした唯一の例である。

碑面の左端も損傷をうけているが、種子・銘文などは風化著しく不明である。額部の突出が著しく、碑面も厚くて2m近い高さをもつ板碑は室町中期には降らない。おそらく他の在銘板碑と比較してその重厚な趣きは鎌倉末期とするのが至当であろう。そして基部は土中に嵌入されていたのである。土壇上より出土した凝灰岩の方形の石材は、板碑を支えるものとしてその前面に置かれていたものであろう。

土壇上の板碑が立っていた下に何らの埋納施設も認められなかったのはこの板碑が供養塔であったことを示し、1号土壇は板碑を支えるために築成されたものであったことをうかがわせる。



第12図 土壇上板碑実測図



第13図 土壇上の板碑

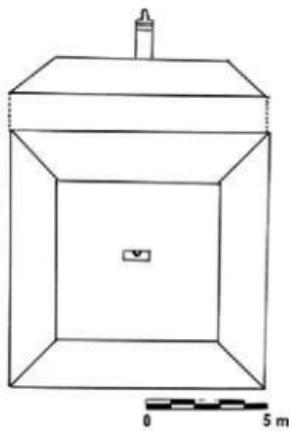
4. 結語

本遺構は供養塔としての板碑を立てるために構築された土壇であることがこのたびの発掘調査によって確かめられた。大きさは方30尺、高さ4尺程度で方形台状を呈する。築成の年代を推定させる資料は出土古鏡と板碑である。「皇宋通宝」は中世においてかなり流通した鏡貨で、板碑は大きさや形態よりして鎌倉末期と考えられる。従って土壇の築成年代も鎌倉末期と推定できるのである。多少降ることがあっても、14世紀前半で南北朝時代よりも下ることはありえないであろう。

天童市内でこのような土壇は、上荒谷に現存する。20m×11mの長方形の土壇で、高さ2m、8基の板碑がたっている。このように板碑や石塔を安置するためにつくられた土壇はかなり多くみられたらしい。かの「餓鬼草子」にも塔婆をたてた土壇が表わされている。また中世の幹線道路といわれた横街道にそって、荒谷原地内に「藤壇」「金石段」「荒谷原土壇」などがあつたが、いまは跡形をとどめない。これらの土壇はもともと方形で、壇上には板碑や五輪塔などの供養塔がたっていたらしい。昭和59年に県教委文化課によって調査された荒谷原の狐塚といふ土壇ももともとは方形であったらしく、五輪塔の空風輪や和犬の骨などが出土している。街道などの傍らに、このような方形土壇が多くつくられたのではないかと思われる。

かつて雁野目と大清水の境にも「一楽壇」という塚があつて、それを崩した時3基の小型板碑が出土したが、その1基に「応永9年」(1402年)の墨書銘が認められた。3基の板碑はもと壇上に立っていたのであろう。このように供養塔をするのに方形土壇が築かれた例は多かったものと思われる。東根地区に分布するタイバラと称する変形五輪塔もほとんど方形土壇上に安置されている。

中世には、いまその築成の意図が不明で性格がよくわからない塚の類が多くつくられた。ほとんどは信仰に関連するものと思われ、飯豊町郡の神や米沢市沼田の例のように3層あるいは5層の土塔もあるが、先年国学院大学考古学教室によって調査された長井市明神堂遺跡にみられるような修驗道に関連すると考えられる方形土壇もある。本調査によって、方形土壇の性格についてその一端が明らかになったことは大きな成果であった。



第14図 1号土壇推定復原模式図

天童市埋蔵文化財調査報告書 第2集

川原子1号土壙
発掘調査報告書

昭和61年10月30日発行

発行 天童市教育委員会

山形県天童市老野森一丁目1番1号

印刷 豊田太印刷所

